

「ジャポニスム2018」続報 14

本号では、12月と2月に開催された現代演劇公演2つと茶の湯講演会 & 呈茶会について報告致します。特に蜷川幸雄演出の「海辺のカフカ」公演と『海辺のカフカ』原作者・村上春樹さんの講演は「ジャポニスム2018: 響きあう魂」を締めくくるにふさわしい催しでした。

1

目次

1. 岡田利規監督「プラータナー：憑依のポートレート」公演 2

12月13日(木)から16日(日)までの3日間、ポンピドゥー・センター主催で実施された現代演劇シリーズの一環、タイの作家 Uthis Haemamool の小説を脚本化した岡田利規演出による演劇「プラータナー：憑依のポートレート」が上演されました。東京芸術劇場、フェスティバル・ドートンヌとの共催で。役者の全員がタイ人という異色の現代演劇です。

2. 蜷川幸雄演出「海辺のカフカ」公演 3

2月15日(金)から23日(土)まで(月曜休演)の8日間に開催された「ジャポニスム2018」終盤の最大の公演事業。故蜷川幸雄監督演出「海辺のカフカ」(村上春樹原作)がパリ市内東北東端にある国立コリヌス劇場)で上演されました。

3. 村上春樹(『海辺のカフカ』原作者)トークイベント 4~6

「海辺のカフカ」公演の最終日となる2月23日(土)の17時から原作者の村上春樹氏によるトーク及びフランスの5人の高校生との質疑応答という特別イベント。村上春樹氏のトークの全容を紹介します。

4. 裏千家による茶の湯講演会&呈茶会 7~8

2月23日(土)と24日(日)にパリ市立ブチ・パレ美術館のオーディトリウムで、一般財団法人今日庵の茶道資料館副館長で今日庵文庫長の伊住禮次朗博士による茶の湯の歴史と茶道具に関する講演会が開催され、その講演会を挟んで同館南パビリオンにおいて自由参加の呈茶会が実施されました。

① 岡田利規監督「プラータナー：憑依のポートレート」公演

12月13日(木)から16日(日)までの3日間、ポンピドゥー・センターで現代演劇シリーズの一環として、岡田利規演出による演劇「プラータナー：憑依のポートレート」が上演されました。タイの作家 Uthis Haemamool の小説を脚本化したもので、画家の波乱に満ちた愛と1990年代から今日までのタイの近過去を織り交ぜた話です。プラータナーとは「欲望」という意味だそうです。ここでいう欲望とは、性的な荒々しい欲望だけではなく、未来を見すえた望みや希望も示す言葉です。

都市と前衛映画や建築等の研究者でもあるバルバラ・テュルキエ氏によれば、原作小説では、タイが専制独裁体制への従属によって傷つけられたデフォルメした身体として表現されており、政治と国家、統制と権力、欲望と身体、見ることと見られること、そうした様々な対極にあるもの間の横断路を求めた線引きとニュアンスが探究されているということです。同氏は、本劇は私たちに共通しているものは何かをあぶり出すために、輪郭を消す方法、あるいはそれらをまたぐ方法、すなわちフロンティアとは何かを問うているとも評しています。

登場する役者たちは全員がタイ人で、言語もタイ語で公演されました。フランス語の字幕はありましたが、タイ語のリズムが非常に耳に心地よく響き、Contact Gonzo 塚原悠也氏による独特の動きと振り付けと呼応して、自然に舞台上で演じられる世界に引き込まれていくようでした。

この演劇公演は、セゾン文化財団、笹川日仏財団等の助成を受け、国際交流基金アジアセンター、株式会社 precog、一般社団法人チェルフィッチュが制作したものを、国際交流基金とポンピドゥー・センター主催、東京芸術劇場、フェスティバル・ドートンヌとの共催で実施されました。



岡田利規演出による演劇「プラータナー：憑依のポートレート」の一場面

② 蜷川幸雄演出「海辺のカフカ」公演

「ジャポニスム 2018」終盤の最大の公演事業といえる故蜷川幸雄監督演出「海辺のカフカ」(村上春樹原作)がパリ市内東北東端にある国立コリヌ劇場で2月15日(金)から23日(土)まで(月曜休演)8日間にわたり上演されました。

中野区野方に住む15歳の少年カフカ(古畑新之)が家出をしてバスで高松へ行き、同市の図書館に身を寄せるが、その女性館長佐伯(寺島しのぶ)にほのかな恋心を抱く。他方、幼い頃に記憶を無くし読み書きできなくなった老人ナカタ(木場勝己)も謎の「入り口の石」を探して、トラック運転手と東京から高松へ向かう。高松とカフカとナカタの関係、そして二人と佐伯やさくら(木南晴夏)との関係が次第に解きほぐされていく、というあらすじです。

時間と空間を自由に交錯させることのできる小説と違って、演劇は限られた時間、限られた空間内にその交錯を表現しなければなりません。特に『海辺のカフカ』のような複雑なプロットが連続展開するような小説を演出するのは、非常に難しかったに違いありません。それを見事に蜷川演出は実現していました。

舞台上には米国自然史博物館のジオラマからヒントを得たという樹木の植わった巨大なケースをはじめ、図書館オフィスや交番、バスやカフェ、さくらの部屋などのケースが林立し、それを黒子が押して「ガラスケースのバレエ」(あるプログラムの表現)のように場所を移動させながら、場面が次々に展開していきます。それらのケースを縫いながら、あるいはケースに入ったりしながら、カフカとその姉とも思われるさくらや母親と思われる佐伯との絡みや、ナカタを中心とする脇役たちの語り等で物語は進行していきます。最後にカフカと佐伯とナカタの時間と空間が収斂していくような形で劇が終わりました。

この演出に観客たちは「信じられない。」「とても美しい舞台だった。」「舞台装飾が素晴らしかった。」などと感嘆し、フランスの新聞等でも大きな賛辞が贈られました。



「海辺のカフカ」の舞台装置 (舞台『海辺のカフカ』公式 Twitter (@butai_kafka) 2月24日付より)

③ 村上春樹（『海辺のカフカ』原作者）トークイベント

「海辺のカフカ」公演の最終日となる2月23日（土）の16時から原作者の村上春樹氏による短いトーク、及びフランスの5人の高校生との質疑応答という特別企画が開催されました。めったに人前で話をしない村上氏の来仏と登壇は、それだけで大ニュースとなり、500席の会場もすぐに満席になりました。

冒頭、村上氏は英語で「私の小説をもとにした『海辺のカフカ』公演で、そしてこの作品を演出した亡き蜷川幸雄氏との素晴らしい記憶と共にパリに来られたことは大変光栄であると共に嬉しく思っています」と挨拶し、「彼のとても革新的で創意あふれる演出を素晴らしいと思います。そして何より皆様にこの公演を楽しんで頂けるよう、願っています」と述べました。（引用のことは、舞台『海辺のカフカ』公式 Twitter (@butai_kafka) より）

ここでは高校生との間で交わされた会話のうち、村上氏の語ったことばを抜粋してご紹介し、彼の人となりや考え、小説観、などをお伝えしたいと思います。（文責は筆者）

「私は日本人ですが外国にいたることが多かった。両親は日本文学の先生だった。十代の時それから遠ざかろうとした。外国文学を読み、惹かれた。神戸に育ったので外国人が多い。愛について書くのが小説だと思っていた。40年間書いてきて飽きないのだから愛は大事なテーマなのだろう。」

「人間には地上の上で生きている人間と地下にいる人間がある。地下にいる人は別のタイプの人間に恋する。それがないと薄っぺらな人間だし、それが生きている証だ。」

「すべてのものが移り変わり、無くなっていく。幸福には移り変わりが無い。私は移りゆくものに共感をもつ。日本の文化は移ろうもの、落ちていくもの、亡びるものに共感をもつ。その意味で私は日本的でもある。」

「私は音痴な上に楽器も駄目だが、音楽を聴くのは好きだった。だからジャズ喫茶をやっていたが、29歳のときに突然小説家になりたくなった。一人っ子で、猫、読書、音楽が好きで少年だったが、その年の4月に野球を見に行った時、ヒットをみて、突然小説家になりたくなった。小説家になるためには、何かが落ちてくるのを待つだけだ。ただ普段から読書する努力をしていなければ、突然は書けない。」

「僕には大きなタンスがある。多くの引き出しがある。書いている時にどの引き出しに何が入っているかをコントロールする必要がある。僕の場合、何がどこにあるか直感としてわかる。目にしたり、耳にしたり、口にしたりしたものを全て引き出しに入れておくのです。」

作成者: 館長 杉浦 勉 t.sugiura@mcjp.fr <https://www.jpfc.jp/mcjp/member/news.html>

「真っ白な状態で書く。プロットをもとに書くことはない。結末は自分にもわからない。『ノルウェイの森』も6人のうち3人は死んでもらおうと思ったが、誰が死ぬかはわからなかった。それでないとつまらない。」

「自分を発見するために物語を書いている。無意識下のものを書く面白いものになる。」

「一人の男として生きてきたので、男の目で書いている。特に長編を書くときは男の目で見ると。いろんな女性を描こうとした。『海辺のカフカ』の主人公は15歳。15歳になって風を感じ、肌で感じた。少女を主人公に書いてもよいが、難しそうだ。」

「基本的にセックスは人間の心のドアを押し開くこと。物語は一つの装置を使う。時代によってセックスは変わる。20年前に書いたものは今の目から見ると微妙に違う。」

「女性を一般化して考えてはいないが、僕の中にはストーリーがある。それをもとに書いている面はある。愛とはどういうものかの定義? ...私には何かが滅びていく側面に惹かれていく個人的性向がある。」

「島本さんはこの世にいない女性のことを想っている。日本ではこの世もあの世もくっついていて。簡単に彼我を行き来する。『カフカ』は彼我の世界の愛がテーマだ。『国境の南、太陽の西』も次元を超えたものだ。男女の違いだけでなく、彼我の世界の違いもあるので、分析するのは難しい。」

「覚えるために書くことはない。自分とは何かを見つけるために書いている。覚えることと思い出すこととは違う。」

「同性愛者が登場するのは、実際の友人にホモセクシュアルが多いからだろう。政治的主張のためではない。」

「小説を書くというのは色々な人になれることだ。とても幸福を感じる。色々な靴に足を入れるようなものだ。自分の中の可能性を発見することだ。可能性は大事なこと。小説の中に自分が入り込まないと面白くない。70歳であることが何かわからない。小説を読んだり、書いたりしていると、自分がどこにいるかもわからない。歳は考えないようにしている。」

「17-18歳だった1968年頃、学生が暴動を起こした時代には理想を持っていた。世界は良くなれないといけない、というように。その時の体験は重要だった。言葉が信用できなくなり、物語を信用する。理想を持つのが良いのか、それが潰された時どうすればよいのか? スローガンへの警戒心が強くある。説明できないが、心に重さ、それが小説ではないか。」

作成者: 館長 杉浦 勉 t.sugiura@mcjp.fr <https://www.jpfc.jp/mcjp/member/news.html>

「父は20歳の時中国に送られて戦争に参加した。『カフカ』でも二人の兵隊が森の中に逃げている。日本でも歴史の作り変えをしている。そうした政治の力に抵抗していかなければならない。インターネットで誤ったことが伝えられている。父から聞いたことを書いたが、それが正しいか正しくないかは知らないが、僕にとっては事実だ。」

「今の世はものすごいスピードで進んでいる。僕が信じるのは何万年前の人々のこと。今の小説家は洞窟のなかで物語を語る語り部にあたる。物語を聞いて、不安、恐怖を忘れるのだ。世が進化しても何万年前のことは変わらない。」

「『カフカ』の一部は僕のものだが、いろいろなものの組み合わせだ。What could I have to be?」

「最も美しい嘘? 最も美しい嘘って何だろう?? 美しい嘘も美しくない嘘も思い出せない。小説という嘘をついてきたからだろう。」



講演会が終わった後の公開撮影タイムの様子

④ 裏千家による茶の湯講演会&呈茶会

村上春樹氏による講演会が始まる1時間前の2月23日(土)の15時から、パリ市中央部にあるプチ・パレ美術館のオーデトリウムで、一般財団法人今日庵の茶道資料館副館長で今日庵文庫長の伊住禮次朗博士による茶の湯の歴史と茶道具に関する講演会が開催され、同時に同館南パビリオンにおいて来館者が自由参加できる呈茶会が実施されました。これは「ジャポニスム 2018:響きあう魂」のクロージングも兼ねた茶の湯会でもありました。

7

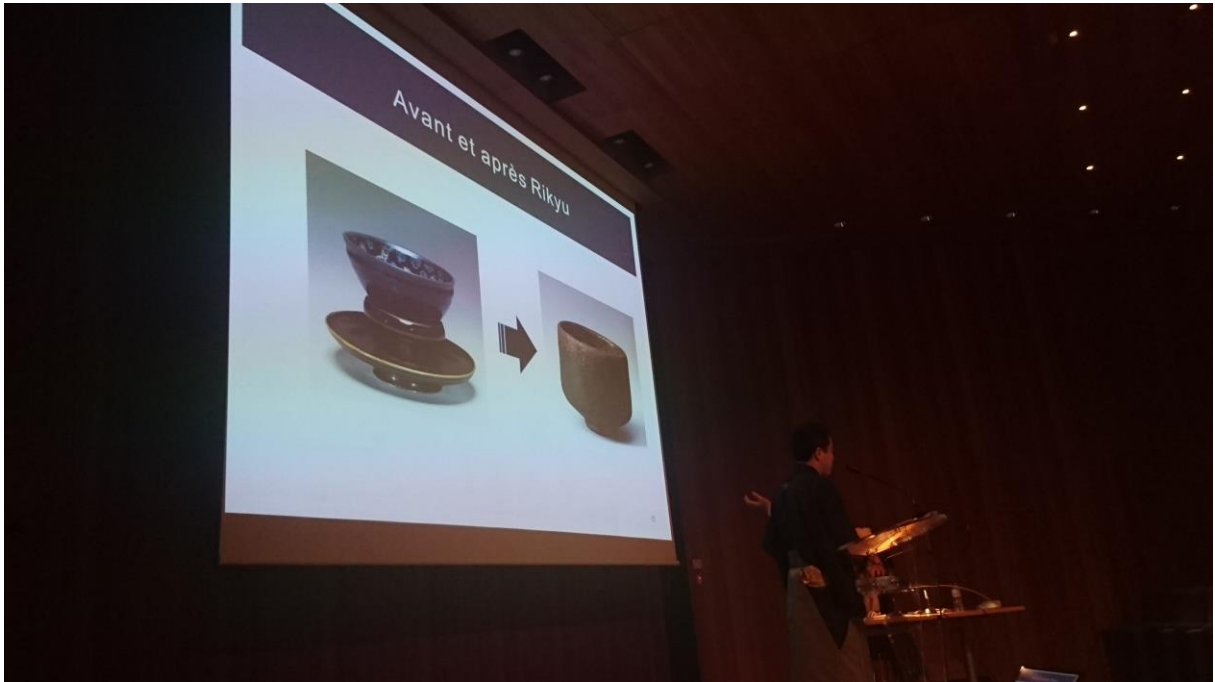


プチ・パレ美術館南パビリオンで実施された裏千家による呈茶会

毎週土曜日の恒例となった「黄色いベスト運動」の真ただ中、筆者は河岸沿いの道がブロックされてタクシーが通行できなかつたため、自宅から早足で30分ほど歩いてプチ・パレ美術館に行き、開始時間ぎりぎりに到着して、まだ息を切らせながら冒頭挨拶をさせていただきました。講演会は翌24日(日)にもありましたので、伊住氏の講演会は翌日拝聴させていただき、挨拶を終えて早々に失礼し、混雑した右岸の道路を1時間ほどかけてコリーヌ劇場に移動し、村上春樹氏の講演会に参加しました。この日は忙しい日で、講演会を聞き終わるとすぐにまた都心に戻り、裏千家の関係者との打ち合わせを兼ねた夕食会に合流しました。

作成者: 館長 杉浦 勉 t.sugiura@mcjp.fr <https://www.jpff.go.jp/mcjp/member/news.html>

伊住氏は中国からの茶の渡来から始まって日本独自の茶の湯の成立・普及までの歴史をパワーポイントを使いながら紹介したのち、総合芸術としての茶の湯、そして茶道具についてもわかりやすく解説しました。「黄色いベスト運動」によるプチ・パレ美術館前の橋の封鎖にもかかわらず前日の土曜日に参加した人たちの顔もあり、日曜日にもかかわらず大勢の人々が来場し、熱心に耳を傾けていました。



講演中の様子



2月23日(土)の「黄色いベスト運動」デモ行進

以上

注記: 本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一の見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。なお、撮影者の記載がない写真は筆者が撮影したものです。